

桐谷

中生代の貝化石の産地 —桐谷（牛負）—

久婦須ダムの上に上流、牛負の海韻橋直下の露頭には、中世代ジュラ紀後期の手取層群の一部が露出して、三角貝やアンモナイトなどの化石を採取することができました。現在では、県営久婦須ダムの湛水に伴い、ダム湖に沈んでしまったのでこの露頭は見ることはできません。

牛負の露頭ではアンモナイトの中でも、「ペリスフィンクテスキリタニエンシス」と名付けられた桐谷の固有種（亜種）が発見されました。また、三角貝（ニッポニトリゴニア・サガワイ）の破片の化石がたくさんとれました。三角貝などの破片が密集して産出することから、この露頭の化石は海流や波によって集まった異地性のものだと考えられます。

桐谷地区では三角貝の密集化石を「爪石（つめいし）」と呼んでいました。昔、桐谷地区の子供たちは、久婦須川の川原に落ちていた爪石を拾い、自分の爪をあててみて合うものを見つけて遊んだことからこの名前がついたそうです。

県道198号線滝脇橋付近には、道路脇の崖の法面の所々に、ミオフィレラや三角貝の断面と思われる窪みがあります。中生代の化石なので、たいへん固くなっています。採取には、鑿がぜひ必要です。



手取湖畔の植物化石 —桐谷（庵谷）—

久婦須ダムの手前、旧桐谷小学校付近の庵谷にも、手取層群の地層が見られます。庵谷の手取層群では、植物化石が産出します。シダ類やベネチテスと呼ばれるソテツによく似た植物、イチョウの仲間、裸子植物の仲間の化石が産出します。

このような化石が産出することから、手取湖のあった時代には八尾付近は熱帯のような気候であったことが分かります。



化石の里八尾 化石資料館 ー海韻館ー

桐谷地区から小井波へ向かうと、化石資料館「海韻館」があります。ここでは、八尾で採取された化石の他、世界各地の化石が展示されています。久婦須ダム湖に沈んでしまったアンモナイト化石「ペリスフィンクテス キリタニエンシス」を見ることのできる、数少ない施設です。



館内には八尾の地層模式図やそれぞれの層が堆積した時代の環境もパネルで分かりやすく解説されており、日本列島全体のでき方がよく分かります。

化石を採取した後で立ち寄り、採取した化石の名前を調べてみてはいかがでしょうか。